

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月30日現在

機関番号：24501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2012

課題番号：20520297

研究課題名（和文） ロシア・ルネサンス期の思想における生の哲学

研究課題名（英文） Russian Philosophy of the Silber Age and “Philosophy of Life”

研究代表者

北見 諭 (KITAMI SATOSHI)

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：00298118

研究成果の概要（和文）：いわゆる「ロシア・ルネサンス」の時代の思想を、西欧の「生の哲学」の受容という観点から問題史的に検討した研究である。西欧の生の哲学に対してロシアの思想家たちが共通して示すアンビバレントな態度を分析することで、一見きわめて多様に見えるこの時代のロシア思想が、同じような潜在的な志向に促されつつ形成されていることを明らかにするとともに、そのことによって生じるこの時代のロシア思想の構造的な類似性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This is a research of Russian philosophy of the Silver Age, in which we are considering especially the process of acceptance of so-called “Philosophy of Life” by a few Russian philosopher in this period. In the attitude of Russian philosophers toward the European “Philosophy of Life” can be seen characteristic ambivalence. Examining it, we came to a conclusion that although each of Russian philosophers of this age developed their original thoughts, in their thoughts can be seen common unconscious intentions, and therefore their thoughts have a similar structure.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学 ヨーロッパ文学

キーワード：ロシア文学、ロシア思想史

1. 研究開始当初の背景

本研究が対象とするいわゆる「ロシア・ルネサンス」の時代の思想は、ソビエト時代にはほとんど研究が行われていなかったこともあり、本国ロシアでもようやく本格的な研究が始まったばかりという状況であった。そうした状況を踏まえ、本研究は、最終的にはこの時代の思想の全体像を捉えることを視野に

置きつつも、現段階では、まずはロシアにおける西欧の「生の哲学」の受容という問題に焦点を絞り、そうした問題史的な視角からこの時代のロシア思想全体に目を向けることにした。

本国のロシアでもこの時代の思想についてはいまだ通史的な研究はなく、個々の思想家に関する評伝的な研究が主流であった。しか

し中には、本研究と同様に、ある特定の観点からこの時代の思想の全体像を捉えようとする研究も出始めていた。たとえば、ソロヴィヨフの影響という観点を取るガイデンコの研究、神秘主義の系譜という観点を取るクラフチェンコの研究、精神分析との関係という観点を取るエトキントの研究などである。こうした研究は、特定の観点からこの時代のロシア思想全体を見渡すことで、漫然と全体に目を通した時には見えてこないような、また個別の思想家研究の観点からは見過ごされてしまうようなロシア・ルネサンスの時代の思想全体に共通して見出されるある種の傾向性を浮き彫りにしており、いまだに十分な研究の蓄積がないこの時代のロシア思想の研究にとっては極めて生産的な研究方法であると言える。

本研究もまた、「生の哲学」の受容というこれまで採用されたことのない観点からこの時代のロシア思想全体に光を当てることで、これまでの研究では見過ごされていたこの時代のロシア思想の共通性格を可視化し、その意味を究明しようとする試みである。

2. 研究の目的

ヴァチエスラフ・イワーノフ、ロースキー、ベルジャーエフ、エルンといった「ロシア・ルネサンス」の思想家たちの思想を対象に、彼らの思想がニーチェやベルクソンやウィリアム・ジェイムズなど、いわゆる「生の哲学」に分類される西欧思想をどのように受容したのかを考察し、そこに見られるロシアの思想家たちの類似した反応から、この時代のロシア思想に共通して見出される潜在的な志向を明らかにすることを目的とする。

これらの思想家たちは互いに独立した思想家であり、それぞれの思想は互いにまったく異なっているし、場合によっては互いに互いを批判しあうような、対立的な性格を持っていることもある。しかし、西欧の生の哲学に対して彼らがとる態度を検討すると、そこにはかなりの程度の類似性が見いだされる。そしてそうした類似した反応がなぜ呼び起されるのかを個々の思想家に即して検討していくと、彼らの思想が、彼らが意識することがないまま、ある共通した潜在的な志向に促されつつ形成されているということが分かってくる。本研究ではそうした潜在的な志向を明らかにするとともに、そうした志向の産物と考えられる彼らの思考の類似したパターンを浮き彫りにし、当時のロシア思想に共通して見出されるある種の思想の構造を明らかにする。

3. 研究の方法

まずは上に名前を挙げた個々の思想家の思想を個別に検討することで、それぞれの思想

家における生の哲学の受容の過程を明らかにする。それによって、表面的には互いに異なった思想を形成しているように見えるこれらの思想家が、生の哲学に対して同じような反応を示していることを確認したうえで、そうした類似した反応を生み出す原因となっていると思われる、この時代のロシア思想に共通して見いだされる意識化されざる潜在的な志向を明らかにするように努める。個別の思想家の思想の研究を踏まえたいうえで、最終的にはこの時代のロシア思想全体に見られるある種の傾向を明らかにするというのが本研究の取る方法である。

4. 研究成果

(1) 最初のテーマであるヴァチエスラフ・イワーノフによるニーチェ受容については、本研究を始める前にすでにある程度の成果を上げていたので、科研費の補助を受けてからは、ロースキーによるベルクソン受容の問題から始めた。

ロースキーの認識論や存在論、またベルクソン論を検討することで、彼のベルクソン受容にイワーノフによるニーチェ受容とほとんど同じようなアンビバレントな態度が見られることを明らかにした。

簡単に言えば、彼らはいずれも、西欧の生の哲学が人間の意識や理性を介さないありのままの实在を捉えようとしていること、そしてそうした实在を動的で創造的な生の流れと見なしていることを高く評価する一方で、西欧の哲学がそのようなありのままの实在、絶え間なき生成の流れを、いかなる形式も秩序も持たないカオスと見なしている点を批判する。そして人間的な意識に映し出される前の实在をカオスと見なすような西欧哲学の世界理解を修正するため、彼らはイデア界という時間を超越した秩序の存在を想定するプラトニズムにもう一つの理論的な支柱を見出し、生の流れとしての实在に、それとは矛盾するはずのスタティックな構造、イデア的な構造を結びつけようとする。それによって、人間の意識が捉える前のありのままの实在を、不断に生成する動的な生の流れと見なす一方で、他方では時間を超越した秩序によって構造化された不動のコスモスと見なすような、矛盾を含んだ独自の思想を構築しようとする。

われわれはここから、イワーノフとロースキーというまったく性格の異なる二人の思想家の思想に、意識化されざる二つの共通の志向が働いていることを明らかにした。つまり、①意識化以前の实在、物自体的な世界を意識や理性を介することなく捉え、それをカント的、主観的なスタティックなカテゴリーから逃れた、創造的に生成変化する動的な世界として捉えようとする志向と（この点で彼らは

生の哲学を評価する)、②その動的に生成する実在の世界を、カント的な主観的な秩序からは逃れているものの、それとは異なる超越的で実在的な秩序によって形式化されたコスミックな世界と見なそうとする志向である(この点で彼らは生の哲学を批判する)。この二人の思想家は、一方では動的に生成する不断の流れとしての実在を求めつつ、他方では時間を超えた不動の秩序によって構造化されたスタティックなコスモスを求めている。われわれは、イワーノフとロースキーというまったく性格の異なる思想家が、互いに矛盾しあうような同じ二つの志向に促されながら自己の思想を構築していることを明らかにした。

(2) 当初の研究計画には入っていなかったが、別の研究会からの依頼でセルゲイ・ブルガーコフの言語哲学を検討することになった。そのため当初予定していたエルンの思想は研究計画から外すことになったが、ロシア・ルネサンスにおいてブルガーコフが有する意味はエルンのそれよりはるかに大きいため、この計画変更はわれわれの研究にとってきわめて有意義な変更だったと言える。当初ブルガーコフを研究計画に含めていなかったのは、彼が西欧の生の哲学の受容にはそれほど関わっていなかったからである。しかしそうした彼の思想にもやはり、イワーノフやロースキーの生の哲学の受容に見出されるのと同じ志向が働いているのを確認することができた。

ブルガーコフの言語哲学には、言語とは直接関係がないにもかかわらず、繰り返しカント批判が現れる。それはイワーノフやロースキーの思想も同じで、そこでもやはりカント哲学の克服が陰に陽に課題となっている。イワーノフやロースキーが物自体的な世界を捉えようするのは、言うまでもなくカントの不可知論に対する批判という意味を持っているし、さらには彼らがプラトニズムに依拠して、実在をコスモスと見なそうとするのは、世界の内に人間的な仮象の秩序しか認めないカント哲学に対する批判である。ブルガーコフの言語哲学も同じである。彼がカント哲学とは直接関係のない言語を問題にしながら、繰り返しカント批判を行うのは、彼もまた同時代の思想家と同じ志向に促されて自らの思想を展開しているからである。

ブルガーコフは、言語を世界を形式化する原理と見なしている。それは、言語を世界の構造化の原理と見なす構造主義の見方と一定の類似性を持っている。しかし、そこには決定的な差異がある。構造主義的な思想は、言語化以前の世界をいっさいの秩序を持たないカオスと見なす一方で、人間がそうしたカオスとしての世界を言語の網の目を介して

捉えることで、世界は人間の意識に対しては言語的な秩序を伴った姿で映し出されると考える。言語は人間的な現象の世界、記号の世界を構成する「超越論的な」原理である。こうした考え方は、カントの世界理解と一定の類似性を持っている。いずれの場合にも、まずは秩序なきカオスとしての世界があり、言語の形式であれ、主観の形式であれ、ともかく人工的な形式がそこに投影されることで、秩序を持った世界が人間の意識に対する現象として成立する。しかし、人間の意識を介する前の実在は、ここでもまた秩序なきカオスである。

ブルガーコフが独自の言語哲学によって克服しようとするのは、こうした世界理解である。ブルガーコフもまた、言語を世界を構造化する原理と考えており、一見構造主義的な思考と似ているように思えるのだが、彼は言語が構成する世界は人間的な現象の世界ではなく、意識化以前の実在の世界そのものであると考えている。彼の考えでは、言語は人間的な世界を構成する「超越論的」な原理ではなく、実在の世界そのものを形式化する「超越的」な原理なのである。世界は人間が意識に映し出すよりも前から、すでに神的な言語によって秩序化された状態で創造されているのである。

ブルガーコフはこうした言語理解を展開するに際して、それをプラトンのイデア論とも結びつけている。人間の意識とは関わりなく存在する実在の世界を構造化する原理というのは、いわば世界創造に関わる原理である。ブルガーコフは言語をそのような神的な原理と見なしている。それは人間の経験的な世界に先立ち、それを超越している超経験的な原理であり、それはプラトンのイデアと同じ意味を持っているのである。

明らかなように、ブルガーコフの言語哲学にもまた、人間的な現象界の背後に遡り、カントが不可知と見なしたありのままの実在を捉えようとする志向があり、さらにはプラトニズムへの回帰によって、その実在を超越的な秩序を備えたコスモスと見なそうとする志向が見出される。われわれが問題にしている二つの潜在的な志向は、言語哲学のような特殊な領域にも入り込み、その思考の展開をも方向づけているのである。

(3) 本研究では最後にニコライ・ベルジャーエフの思想を取り上げた。ベルジャーエフは、自分の思想を同時代の他の思想家の思想とはまったく異質な思想であり、いくつかの点では対立さえするような思想であると見なしている。実際、彼の思想には多くの点で同時代の思想とは対照的な性格が見出される。しかし、より深い層にまで立ち入って考察するならば、彼の思想もまた、われわれが明

らかにしてきたロシア思想の二つの潜在的な志向を持っており、同時代の他の思想と同じ思考のパターンを伴って構築されていることが明らかになる。

同時代の他のロシアの思想家が、根源的な実在をカオスではなくコスモスと見なそうとする志向を持っており、そうした志向のために、生の哲学を離れてプラトニズムへと回帰しようとする傾向を持っていることは既に見たとおりだが、ベルジャーエフは他にもない、ロシア思想のこうした傾向に批判的である。ベルジャーエフによれば、ロシア思想のプラトニズムの傾向は、絶え間ない生成の流れであるはずの実在を、アイデアの無時間的な秩序の中で静止させ、それをスタティックな構造に凝固させてしまうものである。ベルジャーエフは同時代のロシア思想のそうした傾向を批判しつつ、自己の思想を、生成の流れをあくまでも動的な流れとして捉えるようなものとして構築しようとする。

このようにベルジャーエフの思想はたしかに根本的なところでロシア思想の共通傾向とは異質なのだが、しかしベルジャーエフが同時代のロシア思想のプラトニズムの傾向を批判しているからと言って、彼の思想にコスモスへの志向が欠けているわけではない。彼はプラトニズムとは違ったやり方で生の流れをコスモスに変容させようとする。

彼によれば、生の流れとしての実在は、万物へと生成する潜在態であるが、それはあらゆるものを生み出す創造的な流れであるのと同時に、何に現実化するのか分からない盲目的な流れである。ベルジャーエフのそうした実在の捉え方は、生の哲学が考える実在のあり方になりに近いと言える。しかし、ベルジャーエフによれば、こうした盲目的な生の流れは、人間の中を流れるとき、コスミックな流れへと変容する。人間もまた、一方では盲目的な生の流れの産物であるのだが、他方ではその内には生の流れには由来しないもの、神の創造の産物である人格が備わっている。人間はカオスの子であるのと同時に、神の子である。どこへ向かうのか分からないカオティックな生の流れは、人間の中で、その深層にある神の似姿である人格から流れ出す神の意志と合流し、コスミックな流れへと変容するのである。

ベルジャーエフがプラトニズムを批判するのは、時間的な生の流れに対して外から無時間的な秩序を押し付け、生の流れを流れではなくしてしまうからである。プラトニズムの傾向を持つ同時代の思想家たちは、コスモスへの強い志向のために、生の動的な流れを流れではなくしてしまっているのである。それに対してベルジャーエフは、カオティックな生の流れに対して、外から無時間的な秩序を押し付けようとはしない。彼は動的で創造的

な生の流れを流れのままにとどめながら、その流れの中に、内側から形式化の原理を流しこみ、流れを流れのままにとどめつつ、それをコスミックな流れへと変容させようとするのである。カオティックな生の流れは神の意志と合流することで、どこに向かうのか分からない盲目的な流れであることをやめ、神の意志を継承した世界創造へと向かうコスミックな流れに変わるのである。

ベルジャーエフの思想はある面ではたしかに同時代のロシア思想とは対照的である。しかもその対照性は決して表面的なものではない。ロシア思想のプラトニズムの傾向は、潜在的な志向に促された意識化されざる傾向であるが、ベルジャーエフはそうしたロシア思想の深層の性格を捉え、それと対照化させるように自らの思想を形成している。しかしそれにもかかわらず、同時代の思想家たちを動かしている二つの志向は、形を変えてベルジャーエフの思想の中にも現れている。一見、同時代の思想とは異質に見えるベルジャーエフの思想の内にも同じ二つの志向を指摘できたことで、そうした志向がロシア・ルネサンスの時代の思想にとって根源的な意味を持っていることを確認することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 北見諭、ロースキーの直観主義とベルクソン哲学、スラヴ研究 56号、査読有、2009年、37-62
- ② 北見諭、ブルガーコフの言語哲学におけるカント批判のモチーフについて、神戸外大論叢 62号 第3巻、査読有、2011年
- ③ 北見諭、象徴秩序の彼方へ：ベルジャーエフの思想における自由と人格の概念をめぐって、スラヴ研究 60号、査読有、2013年 (掲載予定)

[学会発表] (計4件)

- ① 北見諭、ロースキーの直観主義とベルクソン哲学、「プラトンとロシア」研究会、2009年3月14日、北海道大学スラヴ研究センター
- ② 北見諭、セルゲイ・ブルガーコフの『名の哲学』について、ロシア思想史学会例会、2010年12月25日、早稲田大学
- ③ 北見諭、ブルガーコフの『名の哲学』におけるプラトン主義、科研費研究「近代ロシア・プラトニズムの総合的研究」研究会、2011年3月1日、北海道大学スラヴ研究センター
- ④ 北見諭、ベルジャーエフの思想における

プラトニズムとアンチ・プラトニズム、
科研費研究「近代ロシア・プラトニズム
の総合的研究」研究会、2012年9月18
日、北海道大学スラヴ研究センター

〔図書〕(計1件)

- ① 北見諭、言語と世界構成：ロシア宗教ル
ネサンスの言語論とフォルマリズム (貝
澤、野中、中村編『再考 ロシア・フォル
マリズム：言語・メディア・知覚』せり
か書房 2012、所収)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北見 諭 (KITAMI SATOSHI)
神戸市外国語大学・外国語学部・准教授
研究者番号：00298118

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：